

# カズオ・イシグロの作品における回想場面の意味作用

—川端康成の「雪国」、「千羽鶴」と比較して—

林 宜 佳

## 要 旨

カズオ・イシグロは、自分が影響を受けた日本人作家の名前を尋ねられた際に、川端康成の名前を筆頭に挙げている。それほど川端はイシグロにとって重要な作家なのだが、本論は、イシグロ作品に頻繁に現れる「記憶」のモチーフに注目し、そこにおける「回想の描写」が、川端の作品における描写とどのような類似点や相違点があるのかを検証することを通して、イシグロ作品の特徴を考察する。

【キーワード：カズオ・イシグロ / 川端康成 / 回想 / 風景 / 心象】

## 一、はじめに

日系英国人作家カズオ・イシグロ (Kazuo Ishiguro, 1954) は、幼い頃に日本からイギリスに移住したが、その淡々とした筆致が多くの人たちに興味を呼び起こした。彼と日本の関係について尋ねられた際、イシグロは、自分が影響を受けた作家として数名の日本人作家の名前を挙げているが、中でも川端康成は筆頭に挙げられている。また、Edward G. Seidensticker によって翻訳された川端の「雪国」と「千羽鶴」を一冊にまとめ、*Snow Country and Thousand Cranes*<sup>1</sup>と題して刊行された書籍にイシグロが序文を執筆したという事実を考慮すれば、川端のこの両作品をイシグロが読んだことは確実であると考えられる。そこで、本論は、イシグロの作品にしばしば現れる「記憶」のモチーフに注目し、そこにおける「回想の描写」が、川端康成のこの両作品における描写とどのような類似点や相違点があるのかを検証することを通して、イシグロ作品の特徴を考察する。

## 二、回想する際の現実世界と別世界の境界

イシグロ作品の登場人物たちは、厳しい現実世界に直面した際、回想によって作られた別世界から慰めをもらおうとする点が興味深い。そのような主人公の特徴は、川端康成の「雪国」における主人公の島村の姿、そして「千羽鶴」における主人公の菊治の姿からも窺えると考えられる。以下はまず、川端のこの両作品における主人公が回想する際に描かれている現実世界と別世界の間に注目し、更にイシグロの作品における描写の仕方と比較する。

## 二-1. 類似点 A：目の前にある人物や事物を通して記憶を喚起する

「意識のどこかのレベルでは、常にある人物や事物などを探している」という主人公の心情は、川端の作品にも、イシグロの作品にも似通っていると思われる。以下はまず、川端の作品における描写を取り上げる。【引用①】は、恋人の駒子と再会しようとする島村が汽車に乗っている、「雪国」の中の一場面である。

### 【引用①】

もう三時間も前のこと、島村は退屈まぎれに左手の人差指をいろいろに動かして眺めては、結局この指だけが、これから會ひに行く女をなまなましく覚えてゐる、はつきり思ひ出さうとあせればあせるほど、つかみどころなくぼやけてゆく記憶の頼りなさのうちに、この指だけは女の触感で今も濡れてゐて、自分を遠くの女へ引き寄せるかのやうだと、不思議に思ひながら、鼻につけて匂ひを嗅いでみたりしてゐたが、ふとその指で窓ガラスに線を引くと、そこに女の片眼がはつきり浮き出たのだつた。彼は驚いて聲をあげさうになつた。しかしそれは彼が心を遠くへやつてゐたからのことで、気がついてみればなんでもない、向側の座席の女が寫つたのだつた。外は夕闇がおりてゐるし、汽車のなかは明りがついてゐる。それで窓ガラスが鏡になる。けれども、スチムの温みでガラスがすっかり水蒸気に濡れてゐるから、指で拭くまでその鏡はなかつたのだつた。

（「雪国」 p. 267）

恋人に一刻も早く会いたいと願う島村の切実な感情は、この場面では直接的には描かれていない。ここでは、恋人を直接的に思い出すのではなく、目の前に座っている別の女性（葉子）の姿を見ながら、過去の記憶を喚起した島村の様子が示されている。

このような「目の前にある人物や事物を通して記憶を喚起する」という描写の仕方は、「千羽鶴」の中にも現れる。「千羽鶴」では、主人公の菊治は茶碗を見る度に、その茶碗を使用していた人のことを同時に思い出している（「千羽鶴」 pp. 21-22）。そのくぐりでは、茶会で使用されている茶碗を目にして、その茶碗が太田から、太田の未亡人、菊治の父、ちか子へという経路で渡されてきたことを菊治は次々に思い出す。そして、長い時間が経過したこの時になっても、太田の未亡人や令嬢、ちか子、稲村の令嬢、ほかの令嬢たちなど、その他の人物が、いまだに唇にあてたり、その茶碗を手で撫でさすったりする様子を見て驚愕する菊治の気持ちが描かれている。

また、同作の別のくぐり（「千羽鶴」 pp. 74-75.）では、一対の楽茶碗を見ながら、文子の父が死んで、菊治の父が生きていたころ文子の母のところへ来た時に、それらが夫婦茶碗として使われていたのではないかと昔の場面を想像した菊治の姿も描かれている。父親の不倫相手であった太田夫人の死に対して、彼女と体の関係があった主人公の菊治は、やや不快な感傷にひたっているようだ。

それでは、このような描写の仕方を、イシグロの作品『わたしを離さないで』と比較してみよう。

【引用②】

I still have it now. I don't play it much because the music has nothing to do with anything. It's an object, like a brooch or a ring, and especially now Ruth has gone, it's become one of my most precious possessions.

(*Never Let Me Go*. p. 75)

【引用②】は、カセットテープにまつわる話である。主人公のキャシーは何年前に、ある大切なカセットテープを紛失してしまった。しかし、親友のルースが彼女の切ない思いを知って、別のカセットテープを渡すというくだりである。キャシーはルースの行動に感激して、今でもそのテープを大切に持っているという。ルースがいなくなった今、そのテープはキャシーにとって忘れ難い宝物の一つになった。キャシーがそのテープを目にする度に、ルースのことを思い出すことは間違いない。

以下の文章も、同じく『わたしを離さないで』からの引用である。

【引用③】

Mind you, though I say I never go looking for Hailsham, what I find is that sometimes, when I'm driving around, I suddenly think I've spotted some bit of it. I see a sports pavilion in the distance and I'm sure it's ours. Or a row of poplars on the horizon next to a big woolly oak, and I'm convinced for a second I'm coming up to the South Playing Field from the other side. Once, on a grey morning, on a long stretch of road in Gloucestershire, I passed a broken-down car in a lay-by, and I was sure the girl standing in front of it, gazing emptily out towards the on-coming vehicles, was Susanna C., who'd been a couple of years above us and one of the Sales monitors. These moments hit me when I'm least expecting it, when I'm driving with something else entirely in my mind. So maybe at some level, I am on the lookout for Hailsham.

(*Never Let Me Go*. pp. 280-281.)

【引用③】は、同じく『わたしを離さないで』の主人公、キャシーがヘールシャム（彼女たちが幼いころに過ごしていた寄宿舎）に対する切実な感情を示す場面である。キャシーはしばしば車の運転をする際に目の前に現れる事物に対して、過去の事物や人物を重ね合わせる。例えば、目の前の体育館をヘールシャムのものだと思ったり、道路脇の女性を見て、あれは販売会委員の一人、二年上のスザンナ・Cだと思ったりする。こうした「意識のどこかのレベルでは、常にある人物や事物などを探している」というキャシーの心情は、川端の作品に描かれている島村と菊治の心情と極めて似通っていると考えられる。

## 二-2. 類似点B：現実の世界が歪んだ形で解釈される主人公の心情

以下はまず、川端の作品に描かれている部分を取り上げる。

### 【引用④】

夕景色の鏡のなかで葉子にいたはられてゐた病人は、島村が會いに來た女の家の息子だったのだ。

さうと知ると、自分の胸のなかをなにかが通り過ぎたやうに感じたけれども、このめぐりはあはせを、彼はさほど不思議と思ふことはなかつた。不思議と思はぬ自分を不思議と思つたくらゐのものであつた。

指で覺えている女と眼にともし火をつけてゐた女との間に、なにがあるのかなにが起るのか、島村はなぜかそれが心のどこかで見えるやうな気もする。まだ夕景色の鏡から醒め切らぬせらだらうか。あの夕景色の流れは、さては時の流れの象徴であつたかと、彼はふとそんなことを呟いた。

〔雪国〕 p. 272)

【引用④】では、二人の女のイメージがなぜ重ね合わされたのか、島村自身にはその理由がはっきりとは分かっていない。しかし、「あるイメージ」と「それとは異なるイメージ」が同時に島村の心の中に現れるということ、島村自身は当然の如く感じている。そのような点からすれば、「現実の世界が回想によって歪んだ形で解釈され、自分の心情の変化すら自覚していない」島村の姿は、イシグロの作品における主人公たちの姿と非常に類似していると思われる。

また、このように、＜現実の世界から想像の世界へと移動していく＞という構造を持つ場面は、以下の箇所にも描かれている。

### 【引用⑤】

島村はなにか非現実的なものに乗つて、時間や距離の思ひも消え、虚しく體を運ばれて行くやうな放心状態に落ちると、單調な車輪の響きが、女の言葉に聞えはじめて來た。

それらの言葉はきれぎれに短いながら、女が精いっぱい生きてゐるしるしで、彼は聞くのがつかつたほどだから忘れずにゐるものだつたが、かうして遠ざかつて行く今の島村には、旅愁を添へるに過ぎないやうな、もう遠い聲であつた。

〔雪国〕 p. 322)

これは、駒子に別れを告げて汽車に乗っている島村の心情を描いた場面である。ここでは、島村はすでに身心ともに気力がなくなり、身の周りの現実世界を非現実的なものと捉えている。そして、もはや女の言葉にも関心を持つことがなくなり、彼の耳にはまるでそれが遠方からのこだまのように聞こえている。このように、現実の世界で得た感情を直接に語るのではなく、幻想の

世界の中でその心情を映して描き出そうとする川端の技法が、これらの場面からは明白に読み取れる。

ちなみに、川端作品の主人公の心理描写について、その「新心理主義」を問題視しつつ、作品内に描かれている「無意識」や「深層心理」に注目する橋本陽介による先行研究では、特に「針と硝子と霧」「水晶幻想」という両作品がその典型として論じられている。橋本は、言語形式の観点から、そこにおける「日本語の独白形式としては不自然である」点に注目し、それが「意識の領域なのか無意識の領域なのか必ずしもはっきりとはしていない」と論じている。<sup>2</sup>他方、仁平政人は、「主人公の意識の動き」ではなく、「主人公の意識に対する他の登場人物の視点」に注目して作品の分析を行なっている。<sup>3</sup>仁平によれば、「針と硝子と霧」や「水晶幻想」以降の川端作品においては、同様の形式における「意識の流れ」的な手法は明示的には行われなくなるが、同時にこのような方向性が、諸テキストの「連想」的な性格に形を変えつつ連続しているという。<sup>4</sup>

しかし、同じく「現実の世界が回想によって歪んだ形で解釈され、自分の心情の変化すら自覚していない」という主人公の姿が描かれているイシグロの作品と川端の作品は、表現方法が異なる。上記の引用のように、川端は回想の世界が歪んだ形で解釈された内容を簡潔に纏めるが、イシグロはそれを長く、作品全体で表現しようとしている。特に、【引用⑤】に（後の【引用⑬】にも）現れている「放心状態」という用語は注目に値するだろう。その言葉を用いることで川端があえて強調しようとしたのは「意識・無意識」の間に起こる転換、もしくは無意識的想起だと言える。しかし、こうした顕在的で意図的な手法は、イシグロの作品では取り入れられていないと考えられる。

このように、以上で述べたような類似性があるとはいえ、中でも、川端とイシグロの技法はいくつかの基本的な相違点があると見られる。以下は更に回想についての相違点を取り上げて検証していく。

### 二-3. 相違点 A：身体記憶や官能的な描写

自分の身体で記憶にとどめた恋人のことを思い起こす描写、そして、官能的な描写を通して女性を思い出すという描写の仕方は、川端の作品によく見られる。

「雪国」の中で、既に見た【引用①】のくだりは、駒子という女性をはじめで登場する場面であった。ここでは、「駒子」という女性の名前はまだ提起されておらず、彼女の性格もまだ描写されていない。川端は、鳥村の指で記憶にとどめた駒子の肌の触感、つまり彼自身の「触覚」による描写を通して、駒子という女性の姿や人物像を導入してきたのだ。また、【引用⑥】は、鳥村と一緒に乗車した葉子が再び登場する場面である。

#### 【引用⑥】

「駒ちゃん、これを跨いちゃいけないわ？」

澄み上つて悲しいほど美しい聲だつた。どこかから木魂が返つて來さうであつた。  
島村は聞き覚えてゐる、夜汽車の窓から雪のなかの驛長を呼んだ、あの葉子の聲である。  
(「雪国」 p. 300)

ここでは、島村の耳、つまり「聴覚」によって記憶された葉子の人物像が鮮明に描かれている。島村には「聲の響きの美しさ」として葉子という人物が記憶されている。このように、「触覚によって記憶された人物」と「聴覚によって記憶された人物」という描写は、駒子と葉子のそれぞれの人物像が、島村の身体記憶によって表されているということがはっきりと分かる。

また、「千羽鶴」では、物語の初頭で菊治がちか子のことを想起する場面（「千羽鶴」 p. 9）も、官能的な描写が使用されている。ここでは、主人公の身体の記憶で相手を喚起するのではなく、相手の体の身体的な特徴を思い出すのである。父親の情婦であったちか子は胸にあざがあり、彼女がそのあざのところに生えた毛を鋏でつんでいたという。このような情景は当然ながら親しい人でなければ見る事が出来ないものであるがゆえに、極めて官能的な想起が示されていると言えよう。また、次のような例もある。

#### 【引用⑦】

今朝文子が電話で言つたやうに、文子の母の口紅がしみこんだあとなのだらうか。

さう思つて見ると、貫入にも茶と赤のまざつた色のはいてゐた。

口紅が褪せたやうな色、紅ばらが枯れしぼんだやうな色——そして、なにかについた血が古びたやうな色と思ふと、菊治は胸があやしくなつた。

吐きさうな不潔と、よろめくやうな誘惑とを、同時に感じた。

茶碗の胴に、青みがかつた黒で、太い葉ばかりの草が描いてある。葉のなかに錆色の出たところもある。

その草の繪は単純で健康で、菊治の病的な官能をさますやうだつた。

(「千羽鶴」 pp. 102-103.)

【引用⑦】では、白の中から赤が浮かんでくるような志野の水指を目にする菊治の複雑な心情が描かれている。これは太田夫人が自殺した後、彼女の形見を眺める場面である。太田夫人は菊治の父の不倫相手であり、父を亡くした後、菊治とも体の関係を持っていた。その志野の水指におけるほのかな赤色は、茶渋がついたのか、唇をあてたよごれで口紅が染み込んだのかといろいろ推測した菊治の心情が描かれている。太田夫人と体の関係を持っていた彼は、目の前にある赤や茶が入り混じった色を「口紅が褪せたやうな色」「紅ばらが枯れたやうな色」などのような色彩感覚で表現しながら、同時にそこから生み出された「不潔」感と「誘惑」を心の中に感じている。このような、菊治が心の中で展開する類推は、まさに生前お茶を飲む時の太田夫人の様子を、そして年齢を重ね、病気になり、最後は死に至った彼女の姿を暗に語っているのではないか。

一方、このような身体の記憶で他人のことを思い出す描写、もしくは官能的な想起を示しているという川端の技法は、イシグロの作品には殆ど見られない。身体の記憶で過去のことを思い出すという表現は、イシグロの作品にないわけではないが（『充たされざる者』の中で、主人公のライダーが、ホテルの部屋で眠気に誘われて眠りについた際に、過去のことを思い出すというシーンなど）、その場合は、誰か特定の相手のことを思い出すのではなく、現実世界とは異なった別世界もしくは他の空間を想起する、という場合に限定されている。<sup>5</sup>こうした点から見て、川端の作品では顕著に見られる官能的描写が、イシグロの作品ではほぼ排除されているとまで言っても良いだろう。その点こそが、川端とイシグロの作品の大きな違いなのだ。

#### 二-4. 相違点B：物を人に例える

「事物を人に例えて表現する」、あるいは「事物を通して人を想起する」という表現技法は、川端作品の特徴だと考えられる。前述したように、「千羽鶴」では、菊治はよく茶碗や水指などという器を通して、その道具を使用した人物のことを思い出している。ここで更に注目しておきたいのは、その器の特徴と想起された人物の性格の関連性である。

##### 【引用⑧】

冷たくて温いやうに艶やかな志野の肌は、そのまま太田夫人を菊治に思はせる。しかし、そこに罪といふ暗さも醜さももとなはないのは、水指が名品のせるもあらう。

名品の形見を見るうちに、菊治はなほ太田夫人が、女の最高の名品であつたと感じて来る。名品には汚濁がない。

（「千羽鶴」 pp. 133-134.）

【引用⑧】は、水指の器を目にした菊治が、その志野焼のテクスチャー、言わばその冷たくて温かいように艶やかな肌によって、太田夫人を想起する場面である。その名品の形見を見るうちに、菊治はその名品を使用していた太田夫人自身が女性としても一級品であつたと感じ始める場面である。また、以下の【引用⑨】には、志野と一緒に並べておいた唐津へ目を落とした菊治と文子の、その二つの茶碗に対する感じ方が述べられている。

##### 【引用⑨】

「男茶碗と女茶碗ですね。かうしてならべてみると……。」

（中略）

唐津は繪つけがなく、無地であつた。枇杷色がかつた青に、茜もさしてゐた。腰が強く張つてゐた。

「旅にもお持ちになつて、お父さまのお好きなお茶碗でせう。お父さまらしいですわ。」

（中略）

三四百年昔の茶碗の姿は健康で、病的な妄想を誘ひはしない。しかし、生命が張りつめてゐて、官能的でさへある。

自分の父と文子の母とを、二つの茶碗に見ると、菊治は美しい魂の姿をならべたやうに思へる。

(「千羽鶴」 pp. 136-137.)

ここで描写されている唐津は「絵付けがなく、無地であった。枇杷色がかった青に、茜もさしていた。腰が強く張っていた」といい、文子はその器の様子を見て、菊治の父親らしいとの評価を下す。また、三四百年も昔に作られた茶碗の姿を目にして、その二つの器の中に生命が溢れているかのように感じ、それと同時に、菊治は自分の父、そして文子の母の二人がその中にあたかも「美しい魂」として現れているかのように感じている。

一方、このような「物を人に例える」という技法は、イシグロの作品では減多にないが、『わたしを離さないで』の中で示されるノーフォークという場所のエピソードは注目に値する。

ノーフォーク (Norfolk) という実在の場所は、小説の中でヘールシャムの生徒たちに「ロストコーナー」(Lost Corner) と呼ばれている。彼らは、国中の落し物は最終的にノーフォークに集められるということを信じているのだ。そのくんだり (*Never Let Me Go*, pp. 281-282.) では、トミーが亡くなったある日、ノーフォークを訪れたキャシーの姿が描かれている。そこに見られるのは何エーカーもの耕された大地であり、その前に立っていた柵のいたるところに、ありとあらゆるごみが引っかけり、絡みついていた。キャシーは一度だけ自分に空想を許し、木の枝ではためいているビニールシートと、柵で作られた海岸線に打ち上げられているごみのことを考える。キャシーはこの場所こそが、子供の頃から自分が失い続けてきた全てのもの打ち上げられる場所なのだと思像しているのだ。その想像の中で、そこに立ち尽くしている彼女の前に、やがて地平線上に小さな人の姿が浮かび上がる。そして、それが徐々に大きくなっていき、その人物が彼女にとって忘れ難い人物であるトミーだと判別される。文字通りに、ここに集められてきたものは、ごみばかりであり、キャシーたちが小さい頃から失い続けてきた「物」なのだ。ところが、そのうちに、そのような場所が示すものは、捨てられ、忘れ去られた「物」だけでなく、「人」であったトミーも含まれている。イシグロは、川端のように「物」と「人」の関連性を直接的に結び付けて描写することがない。その点ではイシグロと川端は確かに異なっている。しかし、ここでは、トミーという人物——つまり「提供者」として生きることを義務付けられて生涯を送った人物——はまさしく本当の人間の世界では、使い捨てられた「がらくた」のような存在だったのだとイシグロは暗示しているのではないかと考えられる。

### 三、回想する際の風景と主人公の心象について

文学作品において、作中における空間を主人公の心象と関連して描写する技法はもちろん新しい手法ではない。しかし、イシグロが自分に影響を与えたと認めている作家の一人、川端康成が

この技法を多く用いているということは注目すべきだと思われる。以下は、川端とイシグロの作品における表現に注目し、両者の間における相違点を追究し明らかにする。

### 三-1. 類似点 C：登場人物が死に直面する際の心象、及び脳裏に浮かんだ風景

「雪国」の終盤には、火災が起こっている繭倉から落ちた葉子の姿を目にする島村の心情が詳しく描かれている。彼女が二階から落ちた直後、「島村はどきつとしたけれども、とつさに危険も恐怖も感じなかつた」<sup>6</sup>という奇妙な文章がある。さらに、あたかも島村が微塵も不安を感じなかつたかのように、「なぜか死は感じなかつた」<sup>7</sup>という、島村の心を示す不思議な描写が書かれている。

#### 【引用⑩】

葉子を落とした二階棧敷から骨組の木が二本傾いて来て、葉子の顔の上で燃え出した。葉子はあの刺すやうに美しい目をつぶつてゐた。あごを突き出して、首の線が伸びてゐた。火明かりが青白い顔の上を揺れ通つた。

幾年か前、島村がこの温泉場へ駒子に會ひに来る汽車のなかで、葉子の顔のただなかに野山のともし火がともつた時のさまをはつと思ひ出して、島村はまた胸が顫へた。一瞬に駒子との年月が照し出されたやうだつた。なにかせつない苦痛と悲哀もここにあつた。

（「雪国」 p. 387）

【引用⑩】からは、葉子の顔の辺りを見つめている島村の心象が窺える。島村は落ちたばかりの彼女の姿の美しさに見惚れているかのように、彼女の目や、顎、首などを凝視する。そして、何年か前に汽車の中で彼女の顔に野山のともし火が重なるように映った時の様子を頭の中に浮かべる。こうした「ともし火が映った時の彼女の顔の美しさ」は、ほんのわずかな瞬間であつたが、いま駒子の姿を目の当たりにしている島村にとって、まるで彼女との間に流れた年月が照らし出されたように感じられる。つまり、その日の夕方に葉子の顔に映った一瞬のともし火こそが時の流れを象徴していることを島村は感じる。これはまさに、駒子と葉子の両方に対していずれも曖昧な感情を持ち続けた島村が、葉子が見せたその時の一瞬の美しさによって、駒子と付き合いしてきた年月の長さを実感して悟った瞬間なのではないか。彼にこの「ぞつとした悟った瞬間」があるからこそ、彼ははじめて葉子の死に対して、苦痛と悲哀を感じたのだ。

このように、他者の死に直面する際に頭に浮かんだ風景を描写する技法は、「千羽鶴」の中にも描かれている。

#### 【引用⑪】

菊治は電話の近くに坐つて、目をつぶつた。

北鎌倉の宿で太田未亡人と泊つた帰りの電車から見た夕日が、菊治の頭にふと浮かんだ。

池上の本門寺の森の夕日だった。

赤い夕日はちやうど森の梢をかすめて流れるやうに見えた。

森は夕焼空に黒く浮き出てゐた。

梢を流れる夕日も、つかれた目にしみて、菊治は瞳をふさいだ。

(「千羽鶴」 p. 64)

【引用⑩】は、文子の電話から太田夫人の死を知ったときの菊治の描写である。ここで菊治の頭に浮かんできた風景は、電車から見た本門寺の森の夕日である。赤い夕日は森の梢をかすめて流れるように見え、森はその為に黒く浮き出ていたという。ここでの描写は非常に静かで単純なものである。前述した「雪国」の場面、つまり、炎が葉子の顔の上でめらめらと燃え出すという鮮烈で色彩感に富み、劇的でもある場面と比較してみれば、霞の色によって染められた本門寺の森の夕日という穏やかな遠景は、菊治の心の中の寂寥感を描いていると言って間違いない。また、【引用⑩】にしても、【引用⑪】にしても、同じく風景の描写が主人公の心象のあり様を映し出しているが、そこには「時間の流れ」というもう一つの特徴も見て取れる。

では、このように誰かの死に直面する際の描写について、イシグロの表現はどのようになっているのだろうか。以下では、再び『わたしを離さないで』の一部を検証してみる。

#### 【引用⑫】

Then he said: 'I keep thinking about this river somewhere, with the water moving really fast. And these two people in the water, trying to hold onto each other, holding on as hard as they can, but in the end it's just too much. The current's too strong. They've got to let go, drift apart. That's how I think it is with us. It's a shame, Kath, because we've loved each other all our lives. But in the end, we can't stay together forever.'

(*Never Let Me Go*. p. 277)

【引用⑫】は、提供者のトミーと介護人のキャシーとの会話である。何度も臓器を提供してきたトミーは身体が弱くなり、今度の臓器提供によって命を落とす可能性が高い為、恋人のキャシーに、自分への介護の仕事を辞めて欲しいと訴えるくだりである。別れの言葉を口にするものの、心の中では非常に苦しかったとトミーは語る。その時、トミーの頭に浮かんできた光景は、非常に流れの速い川の中で二人が互いにしがみついて流れに逆らおうとするものの、とうとう別々に流されてしまうというものだった。ここで描写されている風景（流れの速い川）は、明らかに彼らが止むを得ない状況に置かれているということを比喩的に語っており、その流れの速い水は、あまりにも速く流れてしまう時間の流れを示していると読み取れよう。つまり、誰かの死に直面する人物の心に浮かんだこの風景には、その相手と別れることの辛さという心境が疑いなく描かれていると思われる。

このように、主人公が人間の死に直面する際の心境について、風景の描写を通して彼自身の心象を表すという技法は、川端の作品にもイシグロの作品にもあるということが分かった。と同時に、上述した引用の中にもあるように、その場合は風景だけでなく、それに伴う何らかの「時間の流れ」に関する表現も明確に語られていると言える。

### 三-2. 類似点 D: 自分のいる場所とその時の心境

まずは川端の作品を見てみよう。【引用⑬】は、「雪国」の中で、駒子の部屋を出てから山に登るまでの間に、葉子の顔を思い出した島村の描写である。

#### 【引用⑬】

さうして足が早くなつた。小肥りの白い足にかかはらず、登山を好む島村は山を眺めながら歩くと放心状態となつて、知らぬうちに足が早まる。いつでも忽ち放心状態に入り易い彼にとつては、あの夕景色の鏡や朝雪の鏡が、人工のものとは信じられなかつた。自然のものであつた。そして遠い世界であつた。

今出て来たばかりの駒子の部屋までが、もうその遠い世界のやうに思はれる。

(「雪国」 p. 301、下線は論者による)

葉子に出会ったあの日の夕景色と汽車の窓ガラスに映った彼女の赤い頬を思い起こしている島村が、回想に浸ったまま、つい足早に歩いてしまったという場面である。ここでは、「山に登って、ほかの山を眺めると放心状態になった」という島村の心境についての描写は、非常に重要だと考えられる。つまり、「山」という「垂直方向に上昇して行く要素」、そして「ほかの山を眺める」という表現に示された「水平方向に拡大していく要素」は、島村の心境＝「放心状態」と関連づけられていると見て間違いないだろう。こうした「高い場所に登って広い視野を目にする」と放心状態になった」という島村の心の一連の変化は、身の周りの風景とその時の心境の関連性が強く結びついていることを示しており、物語の中で象徴的な技法が使用されていると考えられる。

一方、このような書き方はイシグロの作品にもよく見られる。イシグロの研究者である莊中孝之は、『遠い山なみの光』における「陰鬱な湿地」について、その「不気味な存在」を「主人公が感じている不吉の予感」と共に論じている。更に、莊中は稲佐山という小高い山を取り上げ、それを多くの場面が展開される湿地と対比して論じている。以下は、その稲佐山についての莊中の論と、の中で引かれるイシグロの言葉である。

悦子が友人の佐知子母娘と一緒にその山頂の公園に出かけるくだりは、全体的に陰鬱な雰囲気この作品のなかで、一気に視界が開かれるような印象深いシーンである。イシグロ自身は物語にこの場面を挿入したことについて、次のように語っている。「稲佐山のシーンはテクニク上必要だと考えて書きました。彼女を丘の上に立たせて、もっと広い世界があるの

だということを確認させる必要があった。言い換えれば、丘に登ることで文字通り広い視野を得させたかったんです」。<sup>8</sup>

このように、稲佐山によって醸し出される広大な風景の作品内での象徴的な意味作用は、イシグロによって意識的に設定されたものだということが明らかになる。その一方、このような技法は、『遠い山なみの光』で描かれているだけでなく、『日の名残り』の中でも頻繁に使用されている。以下は、当作品における「自分のいる場所」と「その時の心境」が同時に述べられているくだりである。

【引用⑭】

I imagine the experience of unease mixed with exhilaration often described in connection with this moment is very similar to what I felt in the Ford as the surroundings grew strange around me. This occurred just after I took a turning and found myself on a road curving around the edge of a hill. I could sense the steep drop to my left, though I could not see it due to the trees and thick foliage that lined the roadside. The feeling swept over me that I had truly left Darlington Hall behind, and I must confess I did feel a slight sense of alarm – a sense aggravated by the feeling that I was perhaps not on the correct road at all, but speeding off in totally the wrong direction into a wilderness. It was only the feeling of a moment, but it caused me to slow down. And even when I had assured myself I was on the right road, I felt compelled to stop the car a moment to take stock, as it were.

(*The Remains of the Day*. p. 24)

この部分は、長い間仕事に拘束されていた執事のステューブンスが、遂に屋敷を離れることになり、車で旅に出るという一日目の様子を描いた部分である。そこには、彼を取り囲む風景が大きく変わり、これまでの生活の場から完全に抜け出たことを知ったステューブンスの緊張感が描かれている。また、彼の心境と相関関係をもっている身の周りの情景は、「山沿いにカーブしていく道」、「急なくだり斜面」、「視線をさえぎる木々と濃く茂った葉」のような形で描き出される。それらの不安定な路面状況に彼自身の不安な気持ちが重なり合い、ステューブンスは一旦車を停止するのだ。また、次のような例もある。

【引用⑮】

It was a fine feeling indeed to be standing up there like that, with the sound of summer all around one and a light breeze on one's face. And I believe it was then, looking on that view, that I began for the first time to adopt a frame of mind appropriate for the journey before me. For it was then that I felt the first healthy flush of anticipation for the many

interesting experiences I know these days ahead hold in store for me. And indeed, it was then that I felt a new resolve not to be daunted in respect to the one professional task I have entrusted myself with on this trip; that is to say, regarding Miss Kenton and our present staffing problems.

(*The Remains of the Day*. p. 26)

ここでは、丘の上に登った際のステイーブンスの心境が描かれている。夏のざわめきに包まれ、そよ風を受けながら、彼はようやく旅にふさわしい心構えができたように感じる。ここでは、視覚（高い場所に登って景色を眺める）、聴覚（夏のざわめきという大自然の声を聴く）、触覚（顔にそよ風を受ける）という三つの感覚的な要素が折り重なることによって、ステイーブンスはようやく自分自身の気持ちを心から晴らすことが出来たのだ。

以上のように、風景と心境の相関関係が意識的に使用される例が、川端の作品にも、イシグロの作品にもかなりの頻度で現れるということが明らかになった。ただ、二-2で述べたように、川端は、【引用⑬】においても主人公の「放心状態」を強調し、その後も更に一連の描写を追加している。「いつでも忽ち放心状態に入り易い」という具合に主人公の性格を記し、夕景色や朝雪という自然現象に対して「鏡」という言葉を加えて、まるで幻想世界であるかのように描写し、「人工のもの、自然のもの」という対語を前後に並べて語るなど、主人公の意識の流れの変化を表現する為に様々な工夫を凝らしている。つまり、イシグロと比べ、川端の方が小説中で様々な感覚と戯れていることは間違いなさだろう。

#### 四、まとめ

以上、論じてきた内容を表にすれば、以下のようになるであろう。

類似点	回想する際の 現実世界と別世界の境界	A：目の前にある人物や事物を通して記憶を喚起する B：現実の世界が歪んだ形で解釈される主人公の心情
	回想する際の 風景と主人公の心象について	C：登場人物が死に直面する際の心象、及び脳裏に浮かんだ風景 D：自分のいる場所とその時の心境
相違点	(川端作品にのみ顕著に見られる特徴)	A：身体記憶や官能的な描写
		B：物を人に例える

このように、イシグロと川端の作品には、回想する際の現実世界と別世界の境界の表し方には、[類似点 A、B] のような類似した技法がある。ただ、「主人公たちが無意識的に現実とは異なった世界に踏み込んで行く」という部分は類似しているものの、「主人公の放心状態とその意識の流れ」という感覚描写の重要性に気づかせる川端の技法は、イシグロが目指しているものとは異なる。また、回想する際の風景と主人公の心象についても、[類似点 C、D] が読み取れるばか

りでなく、とりわけ「時の流れ」というイメージがイシグロには付加されている点が注目される。一方、以上のような類似点があるものの、回想というテーマについて、川端の作品にしか見られない特徴というものがある。[相違点A]として記したように、官能的な描写を通して相手を思い出すという技法は、川端が得意とするものであり、[相違点B]のような「物を人に例える」という表現技法は、川端の方がイシグロよりもはるかに直接的に用いている。

つまり、川端は「新心理主義」に依拠して「主人公の心象とその意識の流れ」を様々な形で表現したと言える。それに対して、イシグロは川端の多層的な感覚表現からは距離を取り、登場人物の内面に懐胎されるイメージをより自然な形で描写することにより、作品世界に広がる穏やかな雰囲気淡淡と描き出すことに努めたと言えるのではないか。

## 【註】

- 1 Yasunari Kawabata, *Snow Country and Thousand Cranes*. (Translated from the Japanese by Edward G. Seidensticker; With an Introduction by Kazuo Ishiguro) Penguin Books, 1986.
- 2 橋本陽介「ジョイス『ユリシーズ』の断片的形式と伊藤整、川端康成」『越境する小説文体——意識の流れ、魔術的リアリズム、ブラックユーモア』水声社、2017年、51-63頁。
- 3 仁平政人「川端康成における「新心理主義——方法としての〈心理〉」——」『川端康成の方法——二〇世紀モダニズムと「日本」言説の構成——』東北大学出版会、2011年、93-111頁。
- 4 仁平政人「『抒情歌』論——「夢」の破れ目」、前掲書、113-130頁。
- 5 ここで描かれている「身体記憶と空間」の描写は、川端の作品というより、むしろブルーストの『失われた時を求めて』の第1巻の冒頭で主人公がベッドで横たわる有名な場面と類似しているかもしれない。両作家の作品に共通するのは、「事物の不動性」を通して、空間を認識するうちに、冷静な理性よりも、身体そのものに刻まれた記憶が先行するという描写であろう。
- 6 川端康成「雪国」『川端康成全集第五巻』新潮社、1974年、386頁。
- 7 同上。
- 8 莊中孝之・三村尚央・森川慎也「記憶の奥底に横たわるもの——『遠い山なみの光』における湿地」『カズオ・イシグロの視線 記憶・想像・郷愁』作品社、2018年7月、25-26頁。

## 【参考文献】

### テキスト

- Ishiguro, Kazuo. *A Pale View of Hills*. London Boston: Faber and Faber, 1991. (First published in Great Britain by Faber and Faber Limited, in 1982.)
- Ishiguro, Kazuo. *The Remains of the Day*. London: Faber and Faber, 1999. (First published in Great Britain by Faber and Faber Limited, in 1989.)
- Ishiguro, Kazuo. *Never Let Me Go*. London: Faber and Faber, 2005. (First published in Great Britain by Faber and Faber Limited, in 2005.)
- Kawabata, Yasunari. *Snow Country and Thousand Cranes*. (Translated from the Japanese by Edward G. Seidensticker; With an Introduction by Kazuo Ishiguro) Penguin Books, 1986.

川端康成「雪国」『川端康成全集第五巻』新潮社、1974年。

川端康成「千羽鶴」『川端康成全集第八巻』新潮社、1974年。

### 研究書

Shaffer, Brian W., Cynthia F. Wong, ed. *Conversations with Kazuo Ishiguro*, University Press of Mississippi, 2008.

莊中孝之・三村尚央・森川慎也『カズオ・イシグロの視線 記憶・想像・郷愁』作品社、2018年7月。

仁平政人『川端康成の方法——二〇世紀モダニズムと「日本」言説の構成——』東北大学出版会、2011年9月。

橋本陽介『越境する小説文体——意識の流れ、魔術的リアリズム、ブラックユーモア』水声社、2017年6月。

(林宜佳 東北大学大学院国際文化研究科多文化共生論講座)